

とまちゃん通信

角ともこ県議会レポート

2013.4 April vol.25

孤立者をいなくならない社会に

孤立無業者への支援

先日、孤立無業者(20代から50代の未婚男女で仕事も通学もせず、無作為に選んだ連続2日間、ずっと一人でいたか家族だけだった人が2011年時点で、162万人、2006年の112万人と比べ5年間で4割強の増加になっていることが報じられました。島根県の推計値は2,800人と推計され、60歳未満未婚無業者に対する比率は49.0%と全国平均63.4%に比べて低いのですが、それにしてこの数字は社会との関わりが薄い人たちがいかに多いかということを感じています。

●若年無業者の職業的自立に向けて支援する「しまね若者サポートステーション」設置以降の事業の実績と評価、課題について聞く。

●若年無業者の職業的自立に向けて支援する「しまね若者サポートステーション」設置以降の事業の実績と評価、課題について聞く。

子どもたちをめぐる課題解決への取り組み

子どもたちをめぐるいじめや不登校などの問題や課題解決のために、国の事業を受け、島根県でもスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー活用事業に取り組み始めています。さらに、小学校でのよりきめ細かな対応や支援を行っているために「子どもと親の相談員」を学校に配置して、不登校児童への対応や未然防止の取り組みをしています。

消費生活相談の充実

消費者が被害に遭う詐欺事件は、年々形を変え、巧妙になりますし、また高齢者の商品購入に関わるトラブルなどは後を絶ちません。高齢化が進む島根にあっては、ますます増えていくことが危惧されます。そのため、消費者行政の相談体制の充実が求められます。

財源の確保が厳しくなっても、弱い立場にある県民を守り消費者の生活の安心をもたらす相談事業は充実させ、継続していく必要があるが、見解を聞く。

●財源の確保が厳しくなっても、弱い立場にある県民を守り消費者の生活の安心をもたらす相談事業は充実させ、継続していく必要があるが、見解を聞く。



議場で一般質問

中国との国際交流

今、アジア圏に向けての経済交流、企業進出が盛んに行われていますが、そこには人と人の絆があってこそその交流だと感じます。中国で排日運動が起こったとき、その後もさらに中国に留まり事業を継続している人たちは、単なる経済的なつながりだけでなく人間としての絆を感じました。今後、経済的な交流が進む中国との友好的な交流の継続が求められます。

交流が進む中国寧夏回族自治区との絆を強固なものにしていくには、県の代表である知事が寧夏に出かけて、友好の姿勢を示すことだと考えるがいかがか。

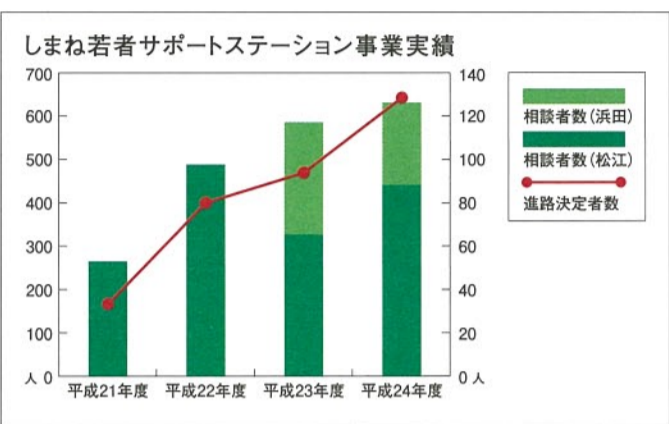
●交流が進む中国寧夏回族自治区との絆を強固なものにしていくには、県の代表である知事が寧夏に出かけて、友好の姿勢を示すことだと考えるがいかがか。

インドとの友好交流

松江市にインド哲学の大家で松江市出身の中村元先生の記念館が出来たことを機に、1月には、松江市に駐日インド大使がお見えになったことや、山陰インド協会が設立されることなど、さらなる交流が始まろうとしています。

知事はこうした交流の動きがある中で、今後のインドとの友好交流についてどのように考えているのか。

●知事はこうした交流の動きがある中で、今後のインドとの友好交流についてどのように考えているのか。



●就職が困難な若者に対して支援の活動を行っている。

●就職が困難な若者に対して支援の活動を行っている。

●就職が困難な若者に対して支援の活動を行っている。

●就職が困難な若者に対して支援の活動を行っている。



中国寧夏回族自治区の農村部の女性たちと

発行者 角 智子 〒690-0064 島根県松江市天神町132
TEL.(0852) 28-8880 FAX.(0852) 28-8881
E-mail sumi@tomachan.net
U R L http://www.tomachan.net/

とまちゃん通信

中国寧夏回族自治区へ行く

3月17日から20日まで、中国寧夏回族自治区に日本寧夏友好交流協会の訪問事業として出かけました。今回の訪問団には島根大学農学部学生も加わっています。

寧夏回族自治区は黄砂の舞う時期ですので心配していましたが、それほど風も強くなく、松江とほぼ同じ気候感覚でした。

寧夏回族自治区の首都である銀川市は、3年前に来た時よりもさらに開発が進んでいる感じで、高層ビルが建ち並んでいますし、車の台数もかなり多くなっていました。

♥寧夏大学との意見交換♥
最初に訪問した寧夏大学外国語学院では、日本寧夏友好交流協会設立の報告と意見交換をしました。この大学からは、毎年、3年生が島大に夏季研修で来ており、昨夏来日した学生たちも同席していました。

本年5月には、松江市で寧夏大学と島根大学との合同シンポジウムが開催されます。また、10月に島根県から、11月には寧夏からそれぞれ訪問団が派遣されることになっていて、交流の協力などについても意見交換しました。



中国の学生に三味線披露

その後、1年生の授業を見学させていただき、島根大学の学生が三味線を披露しました。私自身も初めて彼の演奏と歌を聞かせてもらい、感動しました。学生たちも興味深く聞いていました。

次に、寧夏大学島根大学共同研究所を訪問し、ここでも職員の方々と意見交換しました。交流協会ができたことを歓迎され、今後、寧夏とどういった交流活動をしていくかについて意見交換しました。

今、この研究所には図書室が作られつつあり、日本の書籍を集めているところで、学生が日本語に興味を持ちやすいコミックなども集めたいとおっしゃっていました。

お昼には、昨夏、島根大学に研修に来た学生たちと会食し、島根の話や今後の進路の話など、日本語で交流しました。

♥がんばる農村部の女性たち♥
寧夏の塩池県の農村にも出かけました。銀川市から約2時間のところにある人口700人の集落を、塩池県の外事弁公室の案内で訪ねました。ここでは若い男性はほとんど出稼ぎに出ており、村には高齢者と女性と子どもが残り、農業の担い手はお年寄りと女性という状況です。広大な土地で、これまでは羊の放牧とそばや漢方薬になるカンゾウの栽培が主でしたが、最近、黄河の水を灌漑し、米づくり始めていくとのことでした。

女性が農業の担い手となっていることから、政府では資金提供し、女性が学ぶ場や交流の場をつくり、農業技術などの研修を支援しているとのことでした。



寧夏塩池県の農村風景

寧夏は石炭が出ることから、今、火力発電が盛んに行われており、電力事情もかなり良くなっています。そしてビルの建設が盛んに行われ労働力が求められて、農村から男性が出稼ぎに出ているようです。

♥これからの交流♥
国際交流の窓口である寧夏の外事弁公室にも伺い、ここでも協会設立を報告し、今後の交流事業について意見交換しました。

寧夏の皆さんは、今後も交流を続けていくことに期待を寄せられました。今、寧夏では中東のドバイとの貨物便が就航しています。これを活用して日本との経済交流の可能性を模索したいとの意向を示していました。

寧夏では羊が主に食べられています。今、日本人の指導により肉牛の飼育が行われていて、これから牛肉の食用も広がっていくと思われまます。こうした技術指導により土地も労力も豊富な中国で生産し、中国だけでなく海外へも販路が広がっていく可能性があり、そうした提案もありました。今後とも友好交流を縁に、さらにつながりが広がることを期待されます。

会派で益田市へ調査

民主県民クラブでは、3月22日に益田市の調査を行いました。

♥地域医療を守る♥
最初に益田市の保健センターで、益田の医療を守る市民の会の皆さんからお話を伺いました。

森田泰精会長から、「益田市の地域医療の担い手となる医師不足の問題から地域医療について市民で考えようということが発足した。そして、医療について勉強会から始まり、医療関係者と互いに言うべきことがある関係を作った。」と話されました。

シンポジウムや勉強会、医師と市民の意見交換会、他地域との交流などの活動を通して、市民が病院や診療所の利用を考え、かかりつけ医を決めコンビニ受診を控えて医師の過重労働を減らし、医療従事者が働きやすい環境を作り、地域の医療を守る取り組みをしています。

♥地産地消の給食で元氣♥
続いて、吉田保育所に伺い、地産地消の保育所給食事業の取組みについて、杉原幸江保育所長にお聞きしました。

3月30日、東京の女性就業支援センターで「ベアテ・シロタ・ゴートン」を偲ぶ会が開かれました。

ベアテさんは、戦後、日本国憲法の起草に加わり、男女平等を謳った24条をはじめ、人権尊重の視点で取組まれました。そのことは映画「ベアテの贈り物」で広く知られているところですが、戦前、日本で育ったベアテさんが日本の女性の状況を見てきた

給食の食材を地元産のものを使うことで、地域の農業生産意欲を高め、子どもたちが健康に育つとともに、保護者も安心して子育てできる環境づくりができていくことを目的に進められています。給食の食材は益田市の美都町真砂地区の皆さんが生産しているお米や野菜、休耕田で養殖しているホンモロコという小魚、山野草等地元食材を中心に使い、食材に合わせてメニューを考えているということなんです。5分から7分搗きのご飯で、お魚をよく使い、おやつも基本的にはおにぎりやパンという考え方で取り組んでいます。子どもたちはこの給食のおかげか、欠席率が下がってきているとのことなんです。

給食の食材を地元産のものを使うことで、地域の農業生産意欲を高め、子どもたちが健康に育つとともに、保護者も安心して子育てできる環境づくりができていくことを目的に進められています。給食の食材は益田市の美都町真砂地区の皆さんが生産しているお米や野菜、休耕田で養殖しているホンモロコという小魚、山野草等地元食材を中心に使い、食材に合わせてメニューを考えているということなんです。5分から7分搗きのご飯で、お魚をよく使い、おやつも基本的にはおにぎりやパンという考え方で取り組んでいます。子どもたちはこの給食のおかげか、欠席率が下がってきているとのことなんです。

この後は、島根県芸術文化センター「グラントワ」に行き、澄川喜一センター長（東京スカイツリーのデザイン監修者）も同席されたの視察となりました。

グラントワは創立8年目で来場者数200万人を超え、催事数でも全国のトップクラスをいっています。また、石見に美術館を求めた市民が、その後はボランティアとして支え、市民密着型の施設となっています。

とてもいい施設を持った市民の皆さんを始め、県民の宝として多くの皆さんに、今後も芸術鑑賞、披露の場として活用されていくことを期待します。

人柄を偲ぶ、とてもいい会となりました。

また、生前ベアテさんと係わりのあった方々から、ベアテさんの思い出やエピソードが紹介され、ベアテさんの



保育所の給食を試食



施設について澄川先生からお話を聞く



ベアテさんの娘さんと主催者の赤松良子さん